

海軍航空隊二年半の記録

福岡県 相川 悟

出征前の家族の状況

私は大正十三（一九二四）年一月十日、父相川信一、母ミサオの長男として生まれました。家族は祖父佐吉、両親、妹二人、弟功の七人家族です。家業は米産農家で三町歩の田がありました。

学歴は地元の犬塚尋常高等小学校卒業。福岡県の農業指導所の村方塾で農業を勉強すること二年間の後、昭和十七（一九四二）年五月に海軍を志願したところ見事一発で合格しました。

海兵団では三カ月の訓練、教育でしごかれました。海兵団卒業後、私の叔父が同じ海軍で戦艦「金剛」に乗っていたので私も大きな軍艦を希望しましたが結局、特務艦「伊良湖」に乗艦を命ぜられました。

特務艦とは一体、どんな軍艦なんだと昭和十七

年八月、佐世保に行って見たら、なんと嗜好品を専門に作る軍艦なので、びっくりしました。「伊良湖」の他にも「間宮」という特務艦があるようですが、海軍にお菓子や御馳走作り専門の船があるとはビックリしました。私は「伊良湖」の大砲の射撃担当の伝令を命令され、昭和十七年八月から同十八年一月まで「伊良湖」に乗っていました。せっかく、海軍志願したのに菓子作りの軍艦に乗せられ不満タラタラでした。

当時の若者のあこがれの的は、なんといっても航空兵でしたので試験を受けましたら見事に合格し、昭和十八年一月二十二日、第十六期丙種飛行予科練習生に採用され土浦海軍航空隊に入隊しました。あこがれの航空兵になれた喜びにひたりながら基礎教育の厳しさもなんのその「赤トンボ」の訓練に励むこと四カ月が夢のように過ぎました。昭和十八年五月、茨城県の百里浜航空隊で第三十二期飛行練習生の操縦科教程を赤トンボに乗って四カ月間猛特訓を受けました。

当時の太平洋戦争の戦況は、ミッドウェー敗戦の影響で航空戦力の強化が最重要課題となり、私たち航空兵の教育にも祖国の存亡がかかってきました。

昭和十八年十一月、台湾の新竹海軍航空隊に入隊、九六陸攻、一式陸攻の訓練に入りました。南方海域ではマキン、タラワ、ギルバート諸島の玉砕があり、新竹基地も米海軍機の空襲があり被害を受け緊迫感が迫ってきました。

昭和十九年一月五日、鹿児島県鹿屋海軍航空隊に転勤となる。

同十九年三月二十三日、上海海軍航空隊に転勤を命ぜられ、大村から「白菊」に便乗する。

上海航空隊では偵察練習生の教育隊があり、その操縦教員を命ぜられました。階級は二等飛行兵曹（陸軍の兵長）に進級し、教える立場になり責任が重くなりました。

上海にいる間に南方戦線ではガダルカナル島の争奪戦を巡って日、米海軍の航空戦が激しく戦わ

れ日本の航空兵力は次第に弱体化していきました。特に昭和十九年十月十九日の台湾沖航空戦では、海上での戦闘に不馴れな陸軍飛行隊の参加もあり、実際は負け戦だったのに戦果が大勝利と報告されたために、その後の作戦に悪い影響を与えました。

昭和二十年二月八日、内地の三重県鈴鹿海軍航空隊に転任を命ぜられ、戦闘機操縦術修得の教員を命ぜられました。戦局ますます厳しく硫黄島、沖縄に米軍上陸の危機迫りつつあるときに、いよいよ第一線に出撃するとき来れりと張り切っていました。

同二十年三月一日、第十航空艦隊に編入、操縦科要員となりました。

同二十年五月一日、第三航空艦隊の第十三航空戦隊に編入。

同二十年八月十六日、トラック島に派遣され、零戦五二型に搭乗、同僚と共に二機着陸したら直ちに「戦争は終わったからすぐに復員しろ。乗機は自宅に最も近い安全地帯に置け」と命令され

ツクリしました。

博多出身の同年兵と共に自宅に最も近い博多航空隊（雁の巣飛行場）に着陸したのが八月十七日でした。同日付けで階級が特進で海軍上等飛行兵曹（陸軍曹長）に進級しました。

博多航空隊勤務の整備兵も急な終戦で、その復員作業で大多忙のところへ戦闘機二機が南方から突然帰還したのだから「大むくれ」で「今ごろ、飛行機なんか持ってきたやがって仕様のない奴だ！」「お前ら勝手に、そこにあるドラム缶に入っている油をブッカケて燃やせ！」と怒鳴られましたが、黙って、そのまま飛行機を置いて帰ってきました。

あとで聞いた話ですが、トラック島に残っていた九機の戦隊が玉音放送を聞いてから自爆したのだから分からないが、全機行方不明になったそうです。余談ですが海軍航空隊に籍を置いた二年七カ月の思い出の一つは給与が良かったことです。

航空隊の食事で麦飯を食べたことは一度もあり

ませんでした。白い米飯で寿司なんか時々出ました。

話が前に戻りますが上海航空隊にいたとき、重慶爆撃に行ったことがあります。南昌というところで飛行機に給油して重慶爆撃にも行きました。

九六式陸上攻撃機六機と一式陸上攻撃機二機の八機で重慶飛行場を爆撃しました。帰路、南昌の手前でエンジンの片方が停止したので高梁畑に不時着したことがあります。暗号書と無線機を処分すると同時に旋回機銃を外して応戦態勢をとりました。幸い陸軍部隊が救援にかけつけてくれましたので日の丸を見た時は本当にホッとしました。九六式陸上攻撃機は乗員六人です。内訳は操縦士正副で二人、爆撃手、通信士、射撃手、偵察の計六人が乗組員です。私は副操縦士でした。

昭和二十年八月十七日、郷里の町役場に寄って復員報告をしたら兵事係がビックリして「モウ帰ってきたか！（復員第一号です）」と絶句でした。

実家に帰ったらビックリしながらも無事復員をよろこんでくれました。隣近所で兵隊に行った家

はザラで、沖縄や大陸で戦死した家はアソコモココもで、生きて帰ったことではばらくは肩身の狭い思いもしました。

航空兵の復員を急いだのは、占領軍の日本上陸時に、航空隊員が自爆する危険が大いにあったので、復員第一号を航空兵、特に特攻隊の生き残りに当てたのが真相のようです。

トラック島の航空整備兵

大分県 羽田野 正士

大分県豊後大野市池田で、大正十三（一九二四）年十二月に出生。家業は農業で、昭和七（一九三二）年四月に大恩寺尋常小学校に入学、昭和十四年三月高等科を卒業、その後、家業を手伝いしながら青年学校に通っていました。

戦争も始まり、我々の生活も世相も軍国調になりつつあり、昭和十八年四月二十日に佐世保第二海兵団に入団して、同日、海軍二等整備兵を命ぜられました。そして三カ月の海兵団での初年兵教育を終えて、同年七月五日に海軍一等兵として大村海軍航空隊付きを命ぜられました。

ここで二カ月勤務、九月六日に第五五一海軍航空隊付きを命ぜられ、大東亜戦地外戦務（加算率）一カ月を付され、九月から十月は五五一空にて戦務丁（木更津基地）を付されました。